

# 英文の統語構造を可視化する「寺島記号」に関する考察 —「記号づけプリント」の作成をめぐるって考えたこと—

An Analysis on “Terasima Markers” to Visualize English Syntactic System  
—What I Thought in Making Worksheets According to “Terasima Method”—

山田昇司

YAMADA Syouzi

syouzi@alice.asahi-u.ac.jp

## 目次

1. はじめに — 本論の構成について
  2. 「記号づけプリント」とは何か？ — 枝葉を払って幹を可視化する
  3. 「ふくらまし」フレーズ訳で意味がつながる
  4. マクロの眼で発見する「センマルセン」
  5. 語義を「原義」で与えて文脈から考える
  6. 連結詞を [ ] の中に入れる理由
  7. 名詞節を導く接続詞 that について考える
  8. 「名詞」に変化する疑問接続詞
  9. 「立ち止まる」場所によって変化する that の語義
  10. 先行詞を引きもどして再び登場させる
  11. 統語構造は「どこまで」可視化したらいいのか
    - 11-1. 前置句につける角括弧
    - 11-2. 前置詞句内の what 節につける角括弧
    - 11-3. 記号のつけ方の「統一」は誰のため？
  12. 前置詞句を含んだ関係詞節の記号づけについて
  13. おわりに — 新たな形式の「記号づけプリント」追試のために
- <註>
- <引用文献>
- <資料>

## 1. はじめに — 本論の構成について

本論は2018年1月に書いた原稿が元になっている。私が所属する国際教育総合文化研究所（所長：寺島隆吉元岐阜大学教授）が開催したワークショップ&研究会（2017年12月26～28日）の報告およびその総括として書かれたものである。

このワークショップの内容は「記号づけプリント」の作り方・教え方：初級・中級・上級」というもので、私はその中級の講師を務めた。このとき用いた英文の題材はMike Whitney “Why Trump Won't Start a War With North Korea”（2017/09/08）であった。

これは2017年度後期の授業で使ったものである。当時は北朝鮮がミサイルを飛ばして東アジアの情勢が緊迫していたときだったが、学生はこの英文を読んで日本のメディアとは異なる情勢のとらえ方や米朝の間で起こった出来事の歴史的経緯を知った。この記事には私自身も知らないことがたくさん書かれていたので、ワークショップに参加する英語教師の人たちともそれを共有したいと考えてこの英文を採用した。（註）

この報告・総括を本論集に掲載するにあたって、その後作成することになった新たな「記号づけプリント」をめぐって考えたことを加筆した。第11章以降がそれにあたる。

## 2. 「記号づけプリント」とは何か？ — 枝葉を払って幹を可視化する

まず最初に「記号づけプリント」とはいったいどんなものなのかを説明する。寺島メソッドでは英文の統語構造を可視化するために「丸」「四角」「角括弧」の三つの記号を用いる。それぞれの記号は順に、英文の「述語動詞」「連結詞」「前置詞句」に付けられる。

英語の二大特徴は「固定した語順」と「よく発達した前置詞体系」であるので、後者にあたる「前置詞句」を角括弧でくくると「固定した語順」が自然と浮かび上がってくる。なお、角括弧は英文中の「関係詞文」「従文」などにも付けられる。すると、同じように、英文の「枝葉」を取り払った「幹」の部分が見えてきて、長い文の構造もとらえやすくなる。

寺島メソッドでは学習者の学力や意欲が高くない場合には、この記号をあらかじめ英文につけておくのだが、そのように記号が付けられた英文の載っているプリントを「記号づけプリント」呼んでいるのである。

## 3. 「ふくらまし」フレーズ訳で意味がつながる

授業で使用した「記号づけプリント」には、いま述べた記号の他に語義も全て与えられていたが、ワークショップで用いたものには「記号・語義」に加えてさらに「フレーズ毎の番号」も付した。（資料1）。

しかし、参加者には、最初はこの「記号づけプリント」ではなく、記号・語義がついていない原文を与えて自分で記号をつけながら読むように指示した。そしてその後でこのプリントを配布してこの英文の和訳を番号に沿って順に言ってもらった。これは「記号・語義・番号」がいかに学習者の読解作業を手助けしているかを実感してもらうために行ったものである。

ワークショップ参加者は全員が英語教師だったので、当たり前のことだが、番号順のフレーズ和訳は実にスピーディに進んだ。しかし、それだけでなく、そのフレーズ訳を「ふくらませて」おこなう人が何人もいた。メモをとっていないので、以下に紹介する答えは実際にあった答えとは異なるかもしれな

いが、前のフレーズ訳と自然に繋がるような訳出だったことを記憶している。

(a) 形容詞句（節）を訳出するときに、直前のフレーズの被修飾名詞を補う

<sup>1</sup> Not only does the United States not have the ground forces <sup>2</sup> for such a massive operation...

<sup>1</sup> 米国は地上軍を持たないだけでなく <sup>2</sup> 大規模な作戦のための地上軍を

<sup>1</sup> The US already has the arrangement <sup>2</sup> it wants on the Peninsula.

<sup>1</sup> 米国はすでに体制を持っている <sup>2</sup> それが朝鮮半島で望んでいる体制を

<sup>1</sup> Trump has helped to fend off efforts <sup>2</sup> to reunify the country...

<sup>1</sup> トランプは努力をかわすことに手を貸した <sup>2</sup> 両国を統一するという努力に

(b) 関係代名詞の中身を具体的に示す

<sup>1</sup> Trump has managed to stifle some of the public opposition to deployment of THAAD missile system

<sup>1</sup> トランプは THAAD ミサイルシステムの配備に対する民衆の反対のいくらかを押さえるのになんとか成功した

<sup>2</sup> which features “powerful AN/TPY-2 rader,

<sup>2</sup> そのミサイルシステムは、強力な AN/TPY-2レーダーを特徴とするものだ

<sup>3</sup> that can be used to spy on Chinese territory, ...”

<sup>3</sup> そのレーダーは、中国領内の偵察に使うことができる

(c) 副詞句が修飾する動詞句を補って示す

... <sup>1</sup> the economic and banking systems have been successfully integrated <sup>2</sup> into the US-diminated western system, ...

<sup>1</sup> 経済金融体制はうまく組み込まれている

<sup>2</sup> 米国が支配する欧米体制にうまく組み込まれている

(d) 目的語の動詞句を補って示す

<sup>1</sup> Donald Trump isn't going to start a war <sup>2</sup> with North Korea.

<sup>1</sup> ドナルド・トランプは始めないだろう

<sup>2</sup> 北朝鮮との戦争を始めないだろう

翻訳するときにはやはり「足し算訳」も必要になるだろうが、読解に関しては上記のように言葉を補って訳出していけば大まかな意味はとれることを再認識した。

そこでさらに考えたのだが、授業では訳出の際には、学生にフレーズ訳をその場で書かせることは禁じて、このような「補助訳」「ふくらまし訳」を考えさせて口頭で言う練習をたっぷりさせてはどうかということだ。出来ないときは教師が言って、それを復誦させたり、ひとりの学生が答えた正解をもう一度、別の学生に言わせる、といったやりとりをイメージしている。

授業ではそういったフレーズ訳を考えることに集中し、それを終えてからはじめて鉛筆をもつことを許可して、一定の時間をとって訳を書かせるのである。時間の足りない者は宿題になる。訳の記入（配点しておく）は一区切りついたところで点検する。

これまでフレーズ訳をさせる授業では知らぬ間に進度が速くなって、学生から「訳が書けないのもっとゆっくりやってほしい」という声が出たり、中には語義の下に並べ換えの順番を示す番号だけを書くものがいて点検のときに「不合格、やりなおし」を言い渡すことがあったが、このやり方ならそういった問題はなくなり、よりたくさん英文を読み進んでいくことができるようになる。ポイントは、「補助訳」「ふくらまし訳」を考えることと訳を書くことを同時にさせない、つまり「一時一事」という原則を使うことである。

#### 4. マクロの眼で発見する「センマルセン」

ただ、このような「フレーズ訳」「足し算訳」をするだけで意味は取れても、先述した「固定した語順」、すなわち「名詞+動詞+名詞」は浮かび上がって見えてはこない。寺島メソッドではこの語順を「センマルセン」と呼んでいるが、この英文でこれを示すと以下ようになる。よって、ある程度まとまった英文を読んだあとでこのことをマクロの眼で確認することも大切だと考えた。

Not only does the United States not have the ground forces for such a massive operation  
セン マル セン  
 but, more important, a war with the North would serve no strategic purpose at all.  
セン マル セン  
 The US already has the arrangement [it wants] on the Peninsula.] The South remains  
セン マル セン セン マル セン セン マル  
under US military occupation, the economic and banking systems have been successfully  
セン セン マル  
integrated into the US-dominated western system, and the strategically-located landmass  
セン セン  
in northeast Asia provides an essential platform for critical weapons systems that  
マル セン セン  
will be used to encircle and control fast-emerging rivals, China and Russia.  
マル セン

それぞれの「番号順フレーズ訳」でも小さな語順変換（VO→OV、後置→前置など）が行われているのだが、それをいまいちど大きな目で見て英文で繰り返されている「センマルセン」に着目させるということである。

愛知県から参加された高校教師の前田さんは、その報告の中で考査の追試者に補習をおこなったときに「はじめて英文がわかった」という声が出て感謝されたという話をされたが、そのとき私が、このこと、つまり「マクロの眼でもう一回英文を見直して<センマルセン>に着目するといい」と言ったら、彼は思わず声をあげて頷かれたので同じような指導をされていたのではないかと思った。

このことに関連してもうひとつ言い添えると、奈良県の私立高校で教える原田さんが作成された語順訳穴埋めプリントには英文の下にも「セン」が引かれていて驚いた。これは山田（2018a）で提起したアイデアであるが、実際にそのように作成されたプリントを見てみると、確かに、語順訳欄の「セン」

との一対一対応も見やすくなることがわかった。

またこの原田さんのプリントは、その他にも、語義ヒント欄のレイアウトと網掛け、フレーズ訳入欄のスペース配置、穴埋め語順訳欄への助詞挿入、フレーズ区切りの縦線、といった工夫が施されている。とりわけフレーズ区切りの縦線については、前田さんの報告の中で「番号づけすると授業はやりやすいがプリント作成は手間がかかる」「では代案は」という議論が行われていたので印象に残った。美紀子先生も「これはいいわね」と眩かされていた。

いずれにしても、このプリントは寺島・寺島美(2001)(=英語練習帖『魔法の英語』)で示された「穴埋め語順訳プリント」の雛形が創造的に発展・改良されている例だと思った。

## 5. 語義を「原義」で与えて文脈から考える

第2節で「記号づけプリント」とは何かを説明したときに、このプリントには「記号」だけでなく「語義」も与えているという話をしたが、このワークショップでは単語の意味はなるべく原義に戻って語義を与えることが大切だとの指摘が寺島先生からあった。ワークショップのときに指摘された例には以下のようなものがあった。

... many people think Trump **is calling** the shots  
 多くの人が 思っている トランプが 指示してある 撃つことを  
 叫んでいる

... the possibility is extremely **remote**  
 その可能性 ある きわめて 小さい  
 遠い

... which has helped to undermine the conciliatory efforts  
 それは 手を貸した 損なうことに 融和の取り組みを「  
 下から掘り崩すことに

By **playing** to the right wing and exacerbating hostilities...  
 ~によって 遊び回らうこと 右翼グループに そして 悪化させること 憎しみを  
 演技して見せること

... the war is ongoing and **could flare up** at any time  
 戦争は ある 継続して そして 燃え上がるかもしれない いつ何時  
 可能性がある

次の例はワークショップのための打ち合わせのときに指摘されたものである。記号のつけ方と併せて慣用句 a loose cannon の「語義」も見直してはどうかとのアドバイスだった。

副詞句 形容詞句  
 ... **who** **are using** Trump's reputation [as **a loose cannon** [to great effect]].  
 彼らは 使っている トランプの評判を しまりのない大砲として 大きな効果を発揮する

形容詞句 副詞句  
 ... **who** **are using** Trump's reputation [as **a loose cannon**] [to great effect].  
 彼らは 使っている トランプの評判を しまりのない大砲としての 大きな効果で  
 何をやるかわからない人物としての

ただこのときは「しまりのない大砲」ではいまひとつよくわからないので別の訳語を検討したらどう

かという助言だった。そこで私は「何をやるかわからない人物」という訳を与えたのだが、これでは「原義」に忠実どころかむしろ「意識」になってしまっている。

そこで少し前にもどって私の思考過程を復元してみる。最初わたしは loose を「安全装置のない大砲」「どんな拍子で玉がでてくるかもしれないおっかない大砲」のように解していた。そこで「しまりのない大砲」という訳語を与え、その改訂案として「何をやるかわからない人物」が出てきた。

ところが今回ネット検索してみると次のような説明が見つかった。「17～19世紀頃、大砲は洋上の戦闘での強力な武器として使用されていたが、砲弾を込めた状態で車輪付きの台車に乗せられた上で動かないようにしっかりと船体に固定されていた。ところが激しい戦闘や嵐によって縄が緩み、砲弾入りの大砲が甲板の上をゴロゴロとあちこち動き回って極めて危険な状態になることがあったことから、その状態を loose cannon と呼んだ」。(出典：<http://www.eigowithluke.com/2011/11/loose-cannon/>)

この説明をふまえると「縄で固定されていない大砲」という訳語あたりが適切かもしれない。しかし、この語義から歴史的背景知識なしで前後の文脈だけで「何をやるかわからない危なっかしい人物」を導き出すのはやや難しいかもしれない。

なお、英文には make no bones という慣用句もでてくるのだが、これについても同様に原義「ゼロの骨を作る」から文脈で「隠し立てしない」を導き出すことはなかなか困難だ。辞書には「スープに骨が入っていても気にかけないで飲む」(『アンカーコズミカ英和辞典』学研 2008) とあるが、他にも説があるようだ。

(出典：<https://urashimamaeda.wordpress.com/2015/02/23/make-no-bones-about-it->)

<sup>23</sup>He hates the leadership [in Pyongyang] <sup>24</sup>and makes no bones [about it].

彼は 憎む 指導部を 平壤の そして 隠し立てしない ~について それ

最後に挙げたふたつの成句は、文字面だけの原義から現在の意味を推測することは困難だが、最初の5例については、元の意味を知っていさえすれば、文脈から容易に適切な語義が導き出しようと思った。

いま「容易に」述べたが、いまの学生にはこれがなかなか難しい。漢字が読めないどころか、日本語で思考する力が衰えているからだ。いや、それだからこそ、寺島先生は「なるべく原義を与える」とアドバイスされたのであろう。丸暗記する分量を最小限にとどめて、文脈から意味を考えることは思考力を鍛えるチャンスを与えるからだ。英語を学ぶことは、まさに、母語を耕すことになるのである。

## 6. 連結詞を[ ]の中に入れる理由

第4節で「センマルセン」を浮かび上がらせるという話をしてきたが、その関連でもうひとつ書く。これは1日目の会食のときに隣席の寺島先生に質問して教えていただいたことだが、連結詞を[ ]の中に入れるのは、そうすると枝葉が[ ]で括れて「センマルセン」が可視化できるからだ、ということである。

どうしてそんな質問をしたかという、ワークショップで『魔法の英語』をやっているときに when や if の節が[ ]の中に入っていることに気付き、今回わたしがワークショップで用いたプリントの記号づけと異なることに気づいたからだった。

この連結詞の問題は、山田(2018b)でも論じたことだが、この論考では、最初は[ ]の外にあった連結詞が途中から中に配置されるようになった経過を調べて、そう変わった理由を「前置詞⇔接続詞⇔副詞⇔関係詞」の相互浸透の関係に求めて、英文構造のプロトタイプとしての「前置詞+名詞」の適

用であるという仮説を提示していたのだが、今回の寺島先生の回答はそれとは異なった、「読み」の視点からの指摘であった。

そういった総括をした当の本人が今回ワークショップで用いたプリントでは when, as, after, as far as などの接続詞を [ ] の外に配置していたのは迂<sup>う</sup>闊<sup>かつ</sup>なことだった。

どうしてこんなことが起きたのか—その原因を考えると、ひとつの要因は、山田 (2016: 225) の「文構造の日英対照表」では、日本語との対比という観点からかもしれないが、□は [ ] の外に出ていたことである。

英： \_\_\_ ( ) \_\_\_ [Pr \_\_\_ ] □ [ \_\_\_ ( ) \_\_\_ [Pr \_\_\_ ]]  
 日： [ \_\_\_ [ \_\_\_ Po] \_\_\_ ( ) ] □ \_\_\_ [ \_\_\_ Po] \_\_\_ ( )

\*上図は、同書の「第2刷」からのものである。ここでは主語のセンを太字にした。

一方で、寺島・寺島美 (2001: 22) には次のような図が掲載されている。

英語： 主文 [ 連結詞 従文 ]  
 日本語： [ 従文 連結詞 ] 主文

つまり、私の頭の中には上掲のふたつの図が混在していて、無意識のうちに上図を採用していたということである。

では、どうして上図を無意識のうちに選択していたのかを、さらに省察してみると、連結詞を外に出した方が「従文をまとめて統<sup>す</sup>べている」ということを視覚的にはっきりさせられると感じていたからだと思う。

これは先述の山田 (2018b) でも紹介したことだが、とりわけ、下記のような to 不定詞を英訳する場合には、前置詞 to にあたる日本語「こと」「ように」などを [ ] の外に出しておく方が英訳しやすく思えるからだ。とりわけ、以下のように「ように」の後の [ ] 内にふたつの準動詞があった場合にはそう感じる。

彼は 私に [ 規則正しい生活を (し) そしてしっかりと 食事を (とる) ] ように (言った)。  
 He (told) me (to) [ (lead) a regular life and (take) a meal enough.]

彼は 私に [ 規則正しい生活を (し) そしてしっかりと 食事を (とる) ように ] (言った)。  
 He (told) me [ (to) (lead) a regular life and (take) a meal enough.]

もちろん、下例のように to が角括弧の中に入っている場合であっても、文脈を考えて「ように」を分配よみすれば問題はないのであるが。

ちなみに、寺島・寺島美 (2004: 134) でも、やはり日英対比という観点からだと思うが、従位接続詞は全て [ ] □ のように外に配置されている。

接続詞： ので たびに 間に [ 子文 ] ので 親文

接続詞： because whenever while 親文 because [ 子文 ]

なお、寺島（1986：143）では「含む・含まれる」関係のある文だけで「親文」「子文」という用語を用いると述べていて、本来は上記の例では「主文」「従文」となるはずだが、おそらくはこの本を読む（あるいは使う）対象に英語教師ではなく一般の人を想定しているためにわかりやすい言葉を用いたのではないかと推察される。

しかし、いずれにしても、この、連結詞の [ ] の<sup>うちそと</sup>内外問題は、「統語構造」から見るか「読解の方法」から見るかで異なってくるのではないか、というのが私の推論である。

## 7. 名詞節を導く接続詞 that について考える

いま述べてきたように寺島・寺島美（2001）では、副詞節を導く接続詞 when, if, though, as, before, because は全て [ ] の中に入っていて、これを [ ] ごと削除すれば「センマルセン」が浮かび上がってくるが、名詞節を導く that についてはそうはならない。

これは当然といえば当然で、もし中に入っていて [ ] ごと削れば、残るのは「センマル」だけになってしまう。動名詞や不定詞に導かれる [ ] が主語や目的語を成している場合と同様で、文の構成要素の「セン」が消えてしまうからである。

<sup>5</sup> Later I (heard) <sup>6</sup>[that he (had) always (kept) one drawing [with him][in battle]].

<sup>5</sup> Later I (heard) <sup>6</sup>[  
 ]

ところが、以下のようにすれば「センマルセン」の繰り返しが見えてくる。寺島・寺島美 (ibid.) が that の前で立ち止まらなかったのはその利点を考えたと推測される。

<sup>5</sup> Later I (heard) that <sup>6</sup>[he (had) always (kept) one drawing [with him][in battle]].  
セン マル セン | セン マル セン

この問題に関しては、寺島（1986：142-144）において「that は歴史的に指示代名詞であったのだからそれを複文の読みにも適用してはどうか」（山田による要約）と述べて、以下のように英文の流れに沿って読むことを提起している。

(1) We refuse to believe that the bank of justice is bankrupt.

(2) We refuse to believe **that** : the bank of justice is bankrupt.

私たちはそんなことを信じるわけにはいかない。（つまり）正義の銀行が破綻するなどは。

同書はこの読み方をさらに詳しく紹介して次のように語っている。

私たちが(1)の文を読むとき、英文に沿って左から右へと視線を走らせ、that にぶつかった時、そこで一旦立ち止まり、そこまでを1つの sense-group として意味をとろうとするのは至極当然の

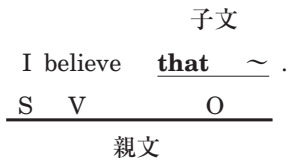


ことではなかろうか。私が「立ち止まり訳」と称し、連結詞にぶつかると、生徒に必ずそれを□  
でかこませ、そこまでをまず直訳させる理由はここにある。

ここまで読んで立ち止まる位置を推測すると that の後になる。久保田（1990）では、ここまでが引用されて that の後で立ち止まって和訳することが提案されている。

ところが、上記の文章の後に続いて書かれている以下の説明を読んでから考えると、立ち止まる位置は that の前になる。

このようにももとは I believe that ; ~であったものが、後になって、that はそれ以下をまとめる「接続詞」と考えられるようになった。それは前置詞 after などが、その後に「文」を従えて徐々に「接続詞」と考えられるようになった過程と似ていると言えよう。



一方で、寺島美（2002：28-29）では、that の後ろで切る「番号づけ」が提起されている。（★印のところは、[ がひとつになっていたが、誤植と思われるので追加した。）

<sup>1</sup> Medical researchers [in Tokyo] <sup>2</sup>(believed) that <sup>3</sup>[doctors (will be allowed) <sup>4</sup>to perform organ transplants <sup>5</sup>[in Japan] <sup>6</sup>[by the end [of the century]]].  
 東京の医学研究者達は それを信じている 医者は許されるだろうと  
 臓器移植をするのを 日本で 今世紀末までに

<sup>1</sup> Seventy-seven percent <sup>2</sup>[of 300 researches <sup>3</sup>[polled in a recent survey]] <sup>4</sup>(predicted) that <sup>5</sup>[hearts, liver and other organ transplants <sup>6</sup>(will be performed) routinely <sup>7</sup>[in Japan] <sup>8</sup>[by the end [of the year 2000.]]]  
 77%が 300人の研究者の 最近の調査で調査された それを予測した  
 心臓、肝臓、その他の臓器移植が 定期的に行われるだろうと 日本で  
 2000年までには

★

<sup>1</sup> The United Nations report (say) that <sup>2</sup>[[if a nuclear war (should occur)] <sup>3</sup> 4 billion people (would die).]  
 国連報告はそう言っている もし核戦争が起こるなら 40億人が  
 死ぬだろうと

なお、同書（p.12）に掲載されている「記号研方式 Sense Grouping（切れ）原則表」を見てみると、前提2において「□で切る」（□ | , | □）と書かれている。私は長い間ずっと「□で切る」というのは「□の前で切る」のだと思い込んでいて、最初は久保田（1990）の論拠として寺島（1986）が引用されている意味がよく理解できなかったが、今回、寺島（ibid.）を丁寧に読んでみて腑

に落ちた。

## 8. 「名詞」に変化する疑問接続詞

さて、「の後ろで切る」という法則が適用されるのは、上記の場合、すなわち目的格をなす that の従属節だけかと思っていたが、寺島・寺島美 (2001:31) には次のように補格で使われる例もあることを見つけた。

<sup>2</sup>That ('s) why <sup>3</sup>[we (call) the beech the Mother [of Woods]]. (p.31)

このような英文をどう処理するかについては、先述の山田 (2018) でも の後ろで切って訳す案を提示している。

<sup>18</sup>Maybe that ('s) why <sup>18'</sup>I (did) what I (did).

Maybe おそらくは that's why それ・ある・理由 did した what I did 私がしたこと

18' おそらくはそれが理由である 18' 私が私のしたことをした

上記の英文には[ ]が付けられていないが、[ ]の中に切れが入ることはないので、私は Maybe that's why+ [I did what I did]. と考えていたにちがいない。

そんなことを考えているうちに、この提案では自分が why を「名詞：理由」と捉えていることに気づいた。名詞節を導く接続詞 that を「それ」と同じである。

<sup>2</sup>That ('s) why <sup>3</sup>[we (call) the beech the Mother [of Woods]].

<sup>18</sup>Maybe that ('s) why <sup>18'</sup>[I (did) what I (did)].

少し横道に逸れるが、次の英文における疑問詞 how も名詞と考えて ではなく としてもよいということになる。(寺島・寺島美 2001:47)

<sup>1</sup>[In January 1922] Mrs.Singh (began) [teaching] Kamela <sup>2</sup>how [to stand upright.]

<sup>1</sup>[In January 1922] Mrs.Singh (began) [teaching] Kamela <sup>2</sup>how [to stand upright.]

なお、この英文では「how to」の結びつきを強く感じるために、sense grouping は の前で切れることになって、の後ろでは切れないが、「疑問接続詞⇔名詞」の例として紹介した。

いずれにしても、上記の疑問詞 why や how を名詞と捉える考え方は、実際にそれらを the reason や the way で置き換えることも可能なので問題はないと思う。

さらに、次のように that 節が補格として現れて の後ろで切れるときもある。

The fact (is) that [he (knew) nothing [about it]].

事実はそれである (それとは) 彼がそれについて何も知らない (ということである)

ここで話をまとめると、連結詞であっても上記のような「セン」と考えられるような場合があり、その場合は連結詞の後ろで sense grouping することが可能であり、そうしたほうが意味が取りやすいということである。

寺島美 (2002:79) では、この方法は「初歩の生徒」にはよいが、「上級者」のためには文構造を尊重して□の前で切ることが望ましいと指摘しているが、この指摘をふまえると、今回の私のプリントではどちらを採用すべきだったのか——次はそのことについて考えてみる。

## 9. 「立ち止まる」場所によって変化する that の語義

私の今回のプリントは、最初に授業で使ったものには sense grouping を示す番号づけはしてなかったが、学生には□の前で立ち止まって訳させた。前期で HOUSE で学んだ「that の前で立ち止まること」をそのまま活かしたいと思ったからである。

TURNIP で学んだ「センマルセン→センセンマル」、HOLE で学んだ「後置修飾→前置修飾」という語順変換に加えて、「□の前では立ち止まること」が英文読解に実際に役立つことを実感させたいと思ったということである。

さて私は、この接続詞 that には以下に示すように「次のこと」という語義を与えていた。以下の英文における学生と教師のやりとりを再現する。

And, yes, I (realize) (that) many people (think) [Trump (is calling) the shots and  
それから、そう、私は知っている 次のこと 多くの人が 思っている トランプが 指示している 撃つことを そして

(that) he (is) an impulsive amateur (who) (might do) something erratic (that) (would trigger)  
次のこと 彼は ある 衝動的な素人 彼は するかもしれない 気まぐれなことを それが 引き起こす

a nuclear conflagration [with the North].  
核戦争を 北朝鮮との

教師：And, yes, I realized (英文読み上げ)

学生：それから、そう、私は知っている

教師：that many people think (英文読み上げ)

「次のこと」とはどんなことかと言うと・・・

学生：多くの人が思っている

教師：Trump is calling the shots (英文読み上げ)

学生：トランプが撃つことを指示していると

教師：and that he is an impulsive amateur (英文読み上げ)

そして「次のこと」とはどんなことかと言うと・・・

学生：彼は衝動的な素人であると

ところが後に出てくる英文では that を前のフレーズに繰り入れてフレーズ訳をする者が出始めた。以下の英文において「トランプは次のことを知っているか」と訳出する学生がいたのである。

(Does he know) (that) North Korea (agreed) [to (end) its nuclear weapons program  
 トランプは知っているか 次のことを 北朝鮮が 同意していた 核兵器開発計画を止めることに

[in 1994] (if) the US (met) its modest demands? (Does he know) (that) the US  
 1994年に ~ならば 米国が 合意する その控え目な要求に 彼は知っているか 次のことを 米国が

(agreed) [to those terms] (but then) (failed) [to (hold) up its end [of the program]?  
 同意した それらの条件に しかしその後 なかった その協定の責任を守ることを

しかし、この訳出は当然な成り行きだった。というのは、接続詞 that への私の語義の与え方が「次のこと」から「次のことを」に変わっていたからだ。ここでは前のフレーズ Does he know に語順変換がないので [ ] も繰り入れて考えて that に語義を与えていたのである。「 [ ] の前で立ち止まる原則」を守ることを教師自身が忘れて、繋がりやすい語義を与えようとした混乱であった。

今回のワークショップ向けにこのプリントを手直ししているときに、sense grouping のための「番号づけ」をしたが、そこでは that の語義は「(次のことを)」のように括弧づけにして与えた。これは「接続詞 that は訳す必要はない、ただつなぎ言葉としての機能を果たしているだけである」ということを示したいと思ったからだった。

<sup>3</sup>(Does he know) <sup>4</sup>(that) North Korea (agreed) [to (end) its nuclear weapons program  
 トランプは知っているか (次のことを) 北朝鮮が 同意していた 核兵器開発計画を止めることに

<sup>5</sup>[in 1994] <sup>6</sup>(if) the US (met) its modest demands? <sup>7</sup>(Does he know) <sup>8</sup>(that) the US  
 1994年に ~ならば 米国が 合意する その控え目な要求に 彼は知っているか (次のことを) 米国が

(agreed) [to those terms] <sup>9</sup>(but then) (failed) [to (hold) up its end [of the program]?  
 同意した それらの条件に しかしその後 なかった その協定の責任を守ることを

冒頭で述べたことだが、このワークショップのときに何人かの受講者が「ふくらまし」フレーズ訳をするのを耳にしたことがひとつのきっかけとなって、私は接続詞 that にはやはり原義である「それ」を活かして語義を与えたほうがいいのか、という気持ちになってきた。

<sup>3</sup>(Does he know) <sup>4</sup>(that) North Korea (agreed) [to (end) its nuclear weapons program  
 トランプは知っているか それ 北朝鮮が 同意していた 核兵器開発計画を止めることに

<sup>5</sup>[in 1994] <sup>6</sup>(if) the US (met) its modest demands? <sup>7</sup>(Does he know) <sup>8</sup>(that) the US  
 1994年に ~ならば 米国が 合意する その控え目な要求に 彼は知っているか それ 米国が

(agreed) [to those terms] <sup>9</sup>(but then) (failed) [to (hold) up its end [of the program]?  
 同意した それらの条件に しかしその後 なかった その協定の責任を守ることを

And, yes, I realize それから、そう、私は知っている  
**that** 何を知っているかということ、それは、北朝鮮が~に同意していたことを

Does Trump know トランプは知っているか  
**that** 何を知っているかということ、それは、米国が~に同意していたことを

ただ、この「それ」以外の「ふくらまし部分」を全て書き込むスペースはとりにくいのでそこを口頭で繰り返して練習させる、その思考訓練に集中させるためにこの練習中は訳を書かせない・・・という事で私が最初に提起した授業の進め方になるのである。

ちなみに、寺島・寺島美 (2001:36) においてはこの接続詞 that には「それ～ということ」という語義が与えられていて、原義「それ」がきっちり入っている。(ちなみに私が4年前に作成した「レ・ミゼラブル物語」のフレーズ訳プリントでは「that:(それは)～ということ」となっていた。)

私は前節で、寺島美 (ibid.:79) では、この方法は「初歩の生徒」にはよいが、「上級者」のためには文構造を尊重して□の前で切ることが望ましいと指摘していると述べたが、この指摘には本稿を書くときに同書を再読していて初めて気づいた。

よって今回教えていた学生が「上級者」だと想定して□の前で切ったのではない。先にも述べたように HOUSE で学んだ that のように (もちろんこちらは関係詞だが) 四角の前で切る原則をここでも適用したい、「立ち止まり原則」はひとつの方が単純でわかりやすい、と考えたからだった。

これまでの私の実践をふりかえると、私はこの接続詞 that には「～と」「～ということ」という語義を与えることも多かった。というのは、そうすると和訳のときに他の従属接続詞 when, if, as などと同様な語順変換ができるからだった。つまり、「従文をまとめる言葉は英語では従文の前だが、日本語では後ろに来る」というふうに説明しやすかったのである。しかし「それ」を採用すれば、関係詞 that とも共通の語義になるという利点が生まれる。

ここでこれまでに出てきた (あるいは見たことのある) 接続詞 that の語義を以下に出しておく。

- 「～と」
- 「～ということ」
- 「それは～ということ」
- 「それは～という内容」
- 「それは次のこと…」
- 「それは何かと言うと…」
- 「それは…」
- 「それはつまり」
- 「それ」
- 「つまり」
- 「次のこと」
- 「次のことを」
- 「次のこと…」
- 「(次のこと)」
- 「φ」

本節の最後に、つい先日美紀子先生から伺った話を紹介する。私は「寺島美 (ibid.) の本文では接続詞 that の後で切ることが提起されているので、巻末のキング演説で that の前で切る記号づけになっているのは誤植ではないですか」とお尋ねしたのだが、先生の返答は「実はこの切り方にはまだ迷いがあってキング演説ではあえて前で切る記号づけにしてある」ということだった。

連結詞をめぐるのは、それを角括弧の「中」に入れるか「外」に出すかという問題があることを本稿

の前半で指摘したが、その連結詞のひとつである接続詞 that に関しても、その「前で」立ち止まるか「後ろで」立ち止まるかという問題が今後の課題として残されていることを私ははじめて知った。

## 10. 先行詞を引きもどして再び登場させる

さてここで少し話題が変わるが、寺島美 (ibid.) を再読しているときに、ある「ふくらまし」フレーズ訳 (p.79) が目にとまった。以下の英文のフレーズ訳では先行詞「手段」が再登場していたからだった。

He said that; the step... I had taken... was dangerous.  
= 彼はそれを言った；その手段は…つまり 私がとった手段は…危険だと

私が今回のワークショップで用いた英文で、このフレーズ訳——先行詞を「引きもどして」再びフレーズ訳に登場させる和訳——をやってみると次のようになるだろうか。番号づけは SVO | [ ] ではなく SV | O | [ ] と変えてみたが、こうしてみると足し算訳を後でさせる応用問題ではなく、直後に書かせた方がいいのではないかと思えてきた。

<sup>5</sup>The US already (has) <sup>6</sup>the arrangement <sup>7</sup>[it (wants) [on the Peninsula]].

米国は すでに 持っている 体制を それが 望んでいる 朝鮮半島で

5 米国はすでに持っている 6 体制を 7 それが朝鮮半島で望んでいる

6+7 それが朝鮮半島で望んでいる体制を

このことと関係して、私は今回のワークショップの第1回打ち合わせのときに議論された問題を思い起こす。このとき、美紀子先生から以下の文 (寺島・寺島美(2001):28) の「足し算訳」は大半の学生が出来ないという話が出され、隆吉先生が「ここは改訂した方がいいかもしれない」と応じられた。

<sup>2</sup>The rain <sup>3</sup>[that (falls) [on beech forests]] <sup>4</sup>(sinks) [into the spongy ground].

2 雨 3 それはブナ林の上に降る 4 スポンジのような地面の中に沈む

<現在> 2+3+4

<改訂案> まず、2+3。 それから、2+3+4

ただこの改訂案でも2+3のところをつまづくかもしれない。というのは、単純に「後置→前置」とすればよいわけではなく、まずフレーズ訳3から「それは」を消し去り、さらに修飾されるのは、厳密に言うと、「雨は」ではなく名詞「雨」だけなので、頭の中ではいったん「雨」と「は」に分離してから「雨」に側置する必要がある。

私の場合は以下のような補助記号をつけて答えさせることが多いのだが、それでも答えがサッと出て来ないことがあるほどである。

雨は [ [それは] ブナ林の上に降る ] → [ [ φ ] ] \_\_\_\_ は

ただ上記の英文は以下のような「ふくらまし」フレーズ訳でもじゅうぶんに意味はとれると思うのだが、こちらの方がむしろより高度な日本語力が必要であるように感じる。

<sup>2</sup>The rain <sup>3</sup>[that (falls) [on beech forests]] <sup>4</sup>(sinks) [into the spongy ground].

2 雨            3 それはブナ林の上に降るのだが、            4 スポンジのような地面の中に沈むことになる

## 11. 統語構造は「どこまで」可視化したらいいのか

前節までは、私が Mike Whitney “Why Trump Won’t Start War With North Korea” (2017/09/08) という英文から「記号づけプリント」をつくるときに遭遇した諸問題を検討したものだだったが、ここからはその後に作成することになった新たな教材をめぐる考えた問題について論じる。

その教材とは2018年後期に使用した次の英文である。前者は看護科の「文献講読」、後者は文系学部（経営学部および法学部）の授業のためのものである。

1. Norman Cousins (1979) “An Anatomy of an Illness Perceived by a Patient” (資料 2)
2. Norm Chomsky (2017) “Requiem for the American Dream—the Ten Principles of Concentration of Wealth and Power” (資料 3)

最初に教材の内容について簡単に説明する。前者は、UCLA 教授を務めた医療ジャーナリストが書いた本である。米国でベストセラーとなり『笑いと治療力』という翻訳が出ている。そこから、パブロ・カザルス（チェリスト）、シュバイツァー博士、著者カズンズがその病気に関わった女性の話を選んだ。

後者は、現存者では論文の引用が最も多いと言われる言語学者かつ政治哲学者 Chomsky 氏へのインタビューをまとめた記録である。そこから第9章「合意を捏造する」を抜粋して教材に採用した。（なお、本書には『アメリカンドリームは終わるあるいは、富と権力を集中させる10の原理』という題名の訳書が出版されている。）

記号づけプリントの形態については、今回のものは英文構造を可視化する記号はあらかじめ付けておらず、学習者が自分で付けるように作成した。ただ、記号の数を、前者は段落ごとに、後者は英文ごとに明示して学習者へのヒントとした。なお、本稿ではこのプリントをどう授業で使ったのかについてはふれず、記号のつけ方に絞って考察をおこなう。

### 11-1. 前置句につける角括弧

まず最初に、前置句につける記号 [ ] について、どんな場合があるかを書き出す。この [ ] については、形容詞句の場合と副詞句の場合がある。どちらの場合も前置詞が付かないときがあるが、そのときも [ ] は付ける。文頭に現れる副詞句については、文章標識（二重下線）の働きをするときがあり、そのときは視認性を考慮して二重下線を引かない。ただ、文章標識は段落間の読みに必要なものなので、一文一文の構造を読む場合には最初から考える必要はないとも言える。

以上が一般的な [ ] のつけ方であるが、ここで取り上げたいのは形容詞句が埋め込みの形で出てくるときの [ ] のつけ方である。下例が示すように2つの方法がある。

<sup>1</sup> And then, all [of a sudden], <sup>2</sup> he said “Pop!” <sup>3</sup> It was [like the sound [of a cork  
[coming out [of a bottle]]]]. (寺島・寺島美 2001 : 56)

<sup>1</sup> This momentous decree came <sup>2</sup> [as a great beacon light [of hope <sup>3</sup> [to millions [of Negro  
slaves, <sup>4</sup> [who (had been seared) in the flames <sup>5</sup> [of withering injustice]. (寺島美 2002 : 145)

上記の例を見比べてみるだけでは少しわかりにくいので、ふたつめの例文に、ひとつめで適用してある [ ] のつけ方をあてはめてみる。すると、お互いの違いがよく見える。

<sup>1</sup> This momentous decree came <sup>2</sup> [as a great beacon light [of hope <sup>3</sup> [to millions [of Negro  
slaves, <sup>4</sup> [who (had been seared) [in the flames <sup>5</sup> [of withering injustice]]]]]].

さらに対応する角括弧を大きさで区別すると、文構造がより明確に捉えられる。長い文の「センマルセン」の姿が一挙に浮かび上がってくるからだ。

<sup>1</sup> This momentous decree came <sup>2</sup> [as a great beacon light [of hope <sup>3</sup> [to millions [of Negro  
slaves, <sup>4</sup> [who (had been seared) [in the flames <sup>5</sup> [of withering injustice]]]]]]].

↓

This momentous decree (came) as a great beacon light of hope to millions of Negro slaves, who had-withering injustice.  
セン                      マル    セン

さてここで、寺島美 (ibid. : 145) ではどうして角括弧が7個省略されているのかを考えてみると、それには合理的な理由があることがわかる。省略箇所にはすでに切れを示す印 (↑部分) があるのだ。だから、たとえそこに角括弧がなくとも、左から右へ読みすすんでいくことができる。

<sup>1</sup> This momentous decree came <sup>2</sup> [as a great beacon light [of hope <sup>3</sup> [to millions [of Negro  
slaves, <sup>4</sup> [who (had been seared) in the flames <sup>5</sup> [of withering injustice].

↑ 述語動詞のマルの閉じ

↑ 形容詞句節の角括弧の閉じ

ただ、私は今回の記号づけプリントでは前者の方法を採用した。というのは、学習者が自分で記号をつけるのは初めての経験になるので「記号」の意味をしっかりと理解するためにそうする必要があったと考えたからだ。例えば、角括弧の閉じの位置によってその前置詞句が形容詞句か、それとも副詞句なのかが決まる。それを文意を考えながら決定するのである。



	副詞句	副詞句	形容詞句
The fingers slowly (unlocked) and (reached) [toward the keys] [like the buds [of a plant			
指 ゆっくりと 開かれた そして 伸びた ~の方へ 鍵盤 ~のように 芽 ~の 植物			
指はゆっくりと開かれた   そして 鍵盤の方へ 伸びた   太陽光へ向かう 植物の			
形容詞句			
[toward the sunlight]]].			
~に向かう 太陽の光			
芽のように			

上図は前者の教材の記号づけプリントの一部分だが、学生に配布したものには記号は付いていない。また、立ち止まる位置を示す番号の代わりに、立ち止まり訳の記入欄に縦棒が挿入されている。学生はこの縦棒や語義を手がかりとして [ ] の記号をつけていくのだが、角括弧のつけ方（閉じ方）で副詞句か形容詞句かを区別することになる。

ここで記号 [ ] に関してではないが、上掲の英文に記号づけさせたときに実際にあった興味ぶかい誤りがあったので、それについて書いておく。この授業では、読解の前時の終わり15分に各班に1段落ずつ割り振って「記号づけ回答」を考えさせて終了チャイムまでに提出させ、次の時間にその回答を書画カメラで映しだして検討するのであるが、上掲文の2つ目の toward にマルを付けている班があった。もう一方の toward には「~の方へ」という語義が与えられていたのだが、こちらには「~に向かう」という語義が示されていて、そこだけを見て動詞と間違えたのである。私は「太陽の方に向かう植物」という訳語を想定して、この意味を与えたのであるが、ここもやはり「原義」である「~の方への」としておくべきだったと思った。

## 11-2. 前置詞句内の what 節につける角括弧

本節では what 節につける記号 [ ] について考える。ふつう、関係詞節には [ ] の記号がつくのであるが、what に導かれる関係詞節が前置句の中にある場合（太字）は、寺島・寺島美（2001）、寺島美（2002）のどちらにおいても、それが付けられていない。

<sup>1</sup>Such a little man, <sup>2</sup>five years [of age],

<sup>3</sup>(Living) [in a world <sup>4</sup>[(that)(s) full [of hate]]],

<sup>5</sup>Far too young [to know] <sup>6</sup>[(what)(s) right or wrong]].

<sup>7</sup>Or [to pay] the price <sup>8</sup>[of what(s) going on]]. 寺島・寺島美（2001：61）

(Don't) they understand [what life (is) for]? 同書 p.63

<sup>1</sup>I (am) happy <sup>2</sup>[to join] with you today <sup>3</sup>[in what (will go) down [in history] <sup>4</sup>[as the greatest demonstration [for freedom] <sup>5</sup>[in the history [of our nation]]. 寺島美（2002：145）

1つめの例文においては2個の what 節がある。ところが、3行目のそれには [ ] が付いているが、4行目のそれには [ ] がない。what 節に関して同一の記号づけルールを用いるならば、以下のようになるはずである。

<sup>7</sup> Or [to pay] the price <sup>8</sup>[of [what('s going) on]].

ところがこのように記号づけをしないのは、ひとつには、角括弧が重なって出てきて目に煩わしく感じて視認性が低くなる、あるいは前置詞のあとには名詞に相当する意味の固まりが来ることは自明であるので、わざわざ [ ] をつける必要はない、といった理由が考えられる。しかし、厳密に統語構造を捉えるならば、やはりここにも [ ] を挿入する必要があるだろう。

同様な記号 [ ] の省略は、動名詞句が前置詞の目的語になるときにも見られる。動名詞句が主語や目的語となるときには [ ] が付けられているにもかかわらず、前置詞句の目的語になるときは、それが無い。寺島・寺島美 (2001) からその例を拾ってみる。

[Reading] comic books [was] my only comfort. p.33

[Coming] down [was] more fun. p.42

[In January 1922] Mrs. Singh [began] [teaching] Kamala [how] [to [stand] upright]]. p.47

A beech forest [is] also useful [for [preventing] floods]. p.29

And I [came] [to [take] pleasure [in [drawing] cartoons]. p.33

He [encouraged] me [to [live] long and [keep] [on [drawing] cartoons]. p.34

We, my cousin, Nicholas and I, [have succeeded] [in [bicycling] up Mt. Kilimanjaro, the highest mountain [in Africa]]. p.39

They [ate] [like dogs] [without [using] their hands]. p.44

これまで私はこの「不統一」については全く気づかなかったのだが、学生に記号づけの課題を与えることになり、英文ごとに記号の数を明示しなくてはならない状況に追い込まれて、はじめてこの「不統一」に気づいたのである。

学生から「どうして同じ意味の固まりなのに異なる記号づけとなるのか」と問われたときに「こちらは目障りでゴチャゴチャするから付けない」という回答では説得力に欠ける気がした。授業はすでに進行中で、記号づけは見やすさを重視した「省略」の方を採用しているが、今後はどうしたらいいのか、いま考えている。

### 11-3. 記号のつけ方の「統一」は誰のため？

ここまで書いてから私はふっとこの問題が以前に論じられたことがあるような気がしてきた。探してみたらやはりその論文はあった。2017年3月の研究会で発表された寺島美紀子「難しい教材を易しく―「記号づけプリント」の新段階(2)」である。

その第1節「長く難しい文は、従属節のみに角括弧を付けることにすると…」に以下のような例が示されていた。話の順に書き出すと以下ようになる。

従属節のみに角括弧を付けるという方針のもとに作成された(a)に対して、ある学生が2つ目の角括弧は about の後、すなわち(b)ではないかと指摘した。(該当箇所★印)

(a) Talk to any of the 38 million Americans [who have outstanding student-loan debt], and he or she is likely to tell you a story ★[about how a single moment in a financial-aid office at the age of 18 or 19 — an age [when most people can barely do a load of laundry without help — ended up running his or her life.] =<sup>26</sup>

(b) Talk to any of the 38 million Americans [who have outstanding student-loan debt], and he or she is likely to tell you a story about ★[how a single moment in a financial-aid office at the age of 18 or 19 — an age [when most people can barely do a load of laundry without help] — ended up running his or her life.] =<sup>26'</sup>

なお、この時、この学生はこの英文の少し前に出てきた以下の英文については「このままでいいんですが…」とも述べている。つまり、この学生は従属節の始まりの部分が間違っているのではないかと指摘したのである。(ただ、sense groupingによる切れはaboutの前になる。)

The answer lies in the uniquely blood-draining legal framework ★[in which federal student loans are issued].

この学生の指摘に基づいて、その部分の前置詞句のみに角括弧を追加したものが(c)である。そして、そこにさらに準動詞句にも角括弧を付けたものが(d)である。

(c) Talk to any of the 38 million Americans [who have outstanding student-loan debt], and he or she is likely to tell you a story [about[how a single moment in a financial-aid office at the age of 18 or 19 — an age [when most people can barely do a load of laundry without help]— ended up running his or her life.]] =<sup>26''</sup>

(d) Talk to any of the 38 million Americans [who have outstanding student-loan debt], and he or she is likely [to tell you a story [about[how a single moment in a financial-aid office at the age of 18 or 19 — an age [when most people can barely do a load of laundry without help]— ended up [running his or her life.]]] =<sup>26'''</sup>

ここから先は私が自分の頭の中を整理するためにおこなうものであるが、そこからさらに全部の前置句にまで角括弧をつけたものが(e)である。最後の(f)は、対応する角括弧の大きさを変えて示したものである。この英文には5組のSVがあるので、対応するペアが分かるように番号を付した。

(e) Talk [to any [of the 38 million Americans [who have outstanding student-loan debt]]], and he or she is likely [to tell you a story [about[how a single moment [in a financial-aid office] [at the age [of 18 or 19]] — an age [when most people can barely do a load [of laundry][without help]]— ended up [running his or her life.]]]

(f) Talk [to any [of the 38 million Americans [who] have outstanding student-loan  
 (s<sup>1</sup>)v<sup>1</sup> s<sup>2</sup> v<sup>2</sup>  
 debt]]], and he or she is likely [to tell you a story [about [how] a single moment [in a  
 s<sup>3</sup> v<sup>3</sup> s<sup>4</sup>  
 financial-aid office] [at the age [of 18 or 19]] —an age [when] most people can barely  
 s<sup>5</sup> v<sup>5</sup>  
 do a load [of laundry][without help]]— ended up [running his or her life.]]]]  
 v<sup>4</sup>

私は(f)の段階まで構造解析してみてもはじめて全体の姿を理解することができた。対応する角括弧の大きさを変え、さらに5組のSVをペア番号を付して書き込んでみてやっと理解できたということだ。そういった難解な英文を使いながらも「予習してくる学生が何人も出てくる」「授業前にプリントをやり始めている」という変化を教室に生み出しているのはどうしてだろう。

実際に試験問題をやってみると、センスグループごとに和訳(訳振り)が与えられているので、その内部の記号づけを考える必要がない。しかもその訳振りには助詞までついている。よく見ると代名詞は具体的な名詞の意味に戻してある。センスグループ間には空白があるので、その並べ換えもやりやすい。そしてその英語語順から日本語語順への並べ換えは一種の「知的パズル」のように取り組める。さらにその後は連結詞の切れに着目して立ち止まり、旧情報→新情報になるように和訳を完成させていくのである。だから、必ずしも上記の(e)(f)レベルのように細かく記号づけをしなくても和訳は完成するのである。

この作業はこの報告があったときにも私は参加者の一人として実際にこの作業をやっていたのであるが、そのときはただ和訳を完成させることに夢中で(より正確には、精一杯で)いま述べたような客観的な分析をしてはいなかった。いま1年半ぶりに再びやってみてその仕組みの巧みに感嘆している。次に新教材を作るときはこの方式の「記号づけプリント」の作成に挑戦してみたいと思った。

さて、私が前節で提起した記号づけの「不統一」の問題について述べると、同論文では「前置詞+関係詞節」における関係詞節の角括弧については、「正確を期すならやはり」つけたほうがよいとの指摘があった。

また「前置詞+動名詞」については、「前置詞+準動詞句」の分析のひとつとして取り上げられているが、「センマルセン」の「セン」が欠落した「埋め込み文」と考えて読み進むことが提起されているだけで、この「不統一」の問題については特に言及されてはいなかった。

ただ、寺島美(1990:52)においては、前置詞 by を接続詞と見たてて後続する動名詞句に角括弧をつけた実験的分析が示されている。同論文で like を接続詞とみなしてそれに続く節に角括弧を付したのと同じである。また、この英文では前置詞 but も接続詞とみなして後続する to 不定詞に角括弧が付けられている。

It (seemed) [there was no other way [but] [to do] away with John [by] [injecting] the poison directly into his immense body]]].

話が少し横道に入るが、この[to do]...の記号づけを[injecting]...と合わせて見てみると、[to do]...のように記号づけしてもいいような気がしてくる。なぜなら、どちらも「準動詞」で「同じ働き」をし

ているからだ。形式は異なっているけど同じ用法で使われている。どうしてこんなことを書いたかという  
と、看護科学生の記号づけに「[to do]…」のような回答があったからだ。これは「正しい誤り」と言っ  
ていいのかもしれない。

話を本筋にもどして本節のまとめに入ると、統語構造を正確に可視化するのであるならば、あらゆる  
埋め込み文に角括弧を付けて記号づけの統一性を保つことが必要であるが、これは教師にだけ了解され  
ていけばよいことかもしれない。学習者の立場からみれば、文構造の細部までその仕組みを発見するよ  
りも、英文の内容を理解できたほうがいいからだ。

上記の英文も、動名詞句冒頭の角括弧を外したとしても、injecting に付けられた右半マルを「埋め  
込み文が始まるサイン」として見ることができれば、ことさら動名詞句の角括弧にこだわる必要はない  
のかもしれない。

It (seemed) [there was no other way [but [to do] away with John [by injecting] the poison  
directly into his immense body]]].

なお、この節の後にも、ネクサスにおける準動詞や分詞構文における角括弧の記号づけの「有無」「不  
統一」を論ずるつもりであったが、同論文ですでに「角括弧を付ける」という基準が示されていること  
が分かったので取りやめることにする。

## 12. 前置詞句を含んだ関係詞節の記号づけについて

最後に私が最近、記号づけに悩んだ英文があるのでその話を書く。それは先に紹介した Norman  
Cousins (1979) “An Anatomy of an Illness...” 中の一文である。シュバイツァー博士がコペンハー  
ゲンの王宮の晩餐に招かれたときに出された料理についての英文である。

The invitation (was) [for dinner], the first course of which (was) Danish herring.  
招待は夕食に対してであった | その最初のコースはデンマーク風の鱈であった。 |

上記のように最初にマル2個と角括弧1個を付けたのだが、その後に付ける角括弧をどうしたらいい  
のかで手が止まった。結局は以下のようにしたのだが、これで本当にいいのだろうか。

The invitation (was) [for dinner], [the first course [of which] (was) Danish herring].  
招待は晩餐に対してであった | その晩餐の最初のコース料理はデンマーク風の鱈であった。 |

この記号づけにする際に参考にしたのが寺島美 (2002: 145) にある次の2文だった。

(1) Five score years ago, a great American, [[in whose] symbolic shadow] we stand today],  
signed the Emancipation Proclamation.

(2) When the architects of our republic wrote the magnificent words of the Constitution  
and the Declaration of Independence, they were signing the promissory note [to which]

every American was to fall heir].

英文(1)で関係詞を含む前置詞句が従属節に埋め込まれているのがヒントになった。ただ、このつけ方に倣うと、(2)の to which にも角括弧が付くことになる。

(2') When the architects of our republic wrote the magnificent words of the Constitution and the Declaration of Independence, they were signing the promissory note [[to **which**] every American was to fall heir].

私はこれまで30年余の長きにわたって「記号づけプリント」を作成してきたが、上記のような形の記号づけをした初めてだった。前節で論じた内容と関連があると思ったのでここに書き留めておくことにした。

### 13. おわりに—新たな形式の「記号づけプリント」追試のために

本論では、英文統語のシステムを可視化する「寺島記号」についてさまざまな角度から検討してきたが、すでに述べたように、連結詞を従属節 [ ] の中に入れるか外に出すか、接続詞 that の立ち止まる位置はその前かその後かについて、まだ統一的な指針は出されていない。実践しながらそれを確かめていくということである。

先に引用した寺島美 (2017) においては、関係詞は中、接続詞は外（ただし、同格は前）という方法を採用しているが、私は、今のところは、関係詞も接続詞も全て [ ] の中に入れる方法を採用している。

したがって、当然、共通部分の「それ」のふくらまし訳振りは異なってくる。以下に that が目的格の場合と同格の場合の違いを示す。下記の2組のペアを比較すると、切れの原則は後者の方が単純で分かりやすいが、訳振りが長くなる点に難がある。

#### <目的格の that>

23-4

Not only has Congress almost completely stripped students of their right to disgorge their debts  
 ~だけではない 議会は ほとんど完全に 奪った 学生から 権利を [投げ出す 負債を  
 through bankruptcy (amazing, when one considers **that** even gamblers can declare bankruptcy!),  
 自己破産宣告をとおして] (驚くべきだ! ~ときに [人が次のように考えている ギャンブラーでさえ 宣言できると 自己破産を]),  
 it has also restricted the student' ability to refinance loans.  
 まず第一に、議会は また 制限した 学生の能力を [借り換える ローンを]

23-4'

Not only has Congress almost completely stripped students of their right to disgorge their debts  
 ~だけではない 議会は ほとんど完全に 奪った 学生から 権利を [投げ出す 負債を

## 英文の統語構造を可視化する「寺島記号」に関する考察

何を考えているかという

through bankruptcy (amazing, when one considers that even gamblers can declare bankruptcy!),  
自己破産宣告をとおして (驚くべきだ! [いつ? 人が考えている(とき) それは ギャンブラーでさえ 宣言できると 自己破産を ということを]),

it has also restricted the student' ability to refinance loans.

まず第一に、議会は また 制限した 学生の能力を [借り換える ローンを]

<同格の that>

23-3'

First of all, a high percentage of student borrowers enter into their loans having no idea

まず第一に、 かなりの割合が 学生の借り手の 入る このローンに [もっている セロの考えを

that they're signing up for a relationship as unbreakable as herpes.

それはつまり [自分たちが契約を交わそうとしている 関係を求めて 同じほど断ち切ることができない 帯状疱疹と いう]]。

23-3"

First of all, a high percentage of student borrowers enter into their loans having no idea

まず第一に、 かなりの割合が 学生の借り手の 入る このローンに [もっている セロの考えを

どんな考えかという

that they're signing up for a relationship as unbreakable as herpes.

[それは 自分たちが契約を交わそうとしている 関係を求めて 同じほど断ち切ることができない 帯状疱疹と いう]]。

私は第7節においては、that には「それ」と訳振りを与え、「誘導的訳」は教師が口頭でおこなうという方法を提起したが、最新の教材 (Cousins と Chomsky) では、上記のように「誘導的訳」も書き込んでおくスタイルを採った。

また、このように並べ換える和訳については、私自身も同じ方法を英訳でおこなっていることに気づいた。動詞句や形容詞節の中の語順変換にはこだわらずに大きな固まりで並べ換える英作文を実践しているからである。ただ、私のこれまでの英訳・並べ換えは以下に示すように、短い文が多く (動詞は2個まで)、また日本語にはすでに記号が付けられている点が異なっていた。

彼は [友をだまそうという] ほんのわずかの意思も 持っていなかった。

He of deceiving his friend the slightest intention doesn't have

彼は [自分が 自分の義務を 果たせる] という 希望を 持っていた。

He he his duty could fulfill that the hope had

後者のやり方で、このスタイルの記号づけプリントを作ったらどうなるだろうか。英文に合わせるると日本語の接続詞も角括弧の中に入ることになるが、そこはうまく処理できるだろうか。その部分は最初は上記のように太字にしておいた方がいいのではないか。そういった不安はあるが、いずれにしても、次年度の教材では一度やってみよう。

なぜなら、この方式は和訳と英訳のどちらにおいても、中身が濃い難解な文になればなるほど役立つもので「基本的だが知的レベルは高い」(山田 2014: 151-152) 授業づくりを可能にすると思うからである。

最後になるが、情報構造についても寺島美 (2017) は興味深い指摘をしているので、それについてもふれておきたい。以下の例のように「意味の通る日本語にしようとする」と、主格に埋め込み文がある場合は訳し上げる形がよい」と述べている点である。

25

“Only a small minority of those who’ve been to college have been told simple things, like what their interest rate was,” says Collinge. “A lot of straight-up lies have been foisted on students.”

“ほんの少数だけが 学生の中の [大学に行っている] 説明された とても単純なことを、  
 ~のような [年率が何なのか]” とコリンジは言う。 多くの 首尾一貫した 嘘が 押しつけられているんだ  
 学生に

○ “大学に行っている学生の中のほんの少数だけがとても単純なことを説明されたんだ。年率がなにかのような、ね”とコリンジは言う。“多くの首尾一貫した嘘が学生に押しつけられているんだ”

× “学生の中のほんの少数だけが大学に行っていて、年率が何なのかのような、とても単純なことを説明された”とコリンジは言う。“多くの首尾一貫した嘘が学生に押しつけられているんだ”

太字の部分と比較してみると、確かに×の和訳は意味が変わってしまっている。「大学に行く学生の数が少数である」ことになっているからだ。単に sense group ごとに左から右へ読み進んでいくだけではダメなときがあるということがよく分かる例である。

安井 (1987: 212) は関係詞節の情報構造について、以下のような例文を引いて「関係詞節を用いると、文の主題や旧情報を無理のない形で示」せると述べている。

- (1) The postcard **which John received from Mary** was very beautiful.  
 = (2) **John received a postcard from Mary.** The postcard which he received from Mary was very beautiful.  
 = (3) **John rereceived a postcard from Mary.** The postcard was very beautiful.

つまり、(1)の文は(2)の文の最初の文が前提としてあり、(2)は(3)のようにも言ってもよい、のである。そのことをふまえて25の英文を考えると、Only a small minority of those「新情報」、who’ve been to college「旧情報」となるので、和訳するときには訳し上げないと「旧情報→新情報」の順番にはならないのだ。

かなり長い「おわりに」となってしまったが、本論を閉じるにあたって「記号づけ」の難しさ、奥深さを改めて感じたことを記しておきたい。というのは、寺島 (2002: 177-179) が指摘するように、英語の品詞間には「相互浸透」「相互移行」の関係があるからだ。第6節では why が疑問接続詞とも名詞とも言える例を挙げたし、何度も取り上げて論じた接続詞 that にしても、話者がその後で切って読むのを耳にすることがあるが、そのときの that は接続詞というよりもむしろ予告の指示代名詞になっている。「記号づけ」の統一性にこだわると確かに見えてくるものはたくさんあるが、またその反面、それにこだわり過ぎると逆に見えなくなるものも出てきて、創造的な教材づくりの障害物ともなる。それゆえ「記号づけ」の問題はあくまで学習者の立場に立って考えていくことが大切ではないかと私はいま考えている。(2018/10/23)



<註>

私がときどき訪れるサイトに「マスコミに載らない海外記事」がある。毎日1本の記事がアップされる。翻訳は少々荒っぽいのが、その速報性には代えがたい。Whitney氏の記事はそこで見つけた。当時は北朝鮮のミサイル発射でJアラートが出され国内のメディアは北朝鮮批判一色だった。東アジアで戦争が起こるかもしれないという危機感と緊張感を私は感じていた。

ところがこの記事は「トランプは朝鮮半島ではすでに米国が望む経済・金融体制を持っているので北朝鮮とは戦争を始めないだろう」と主張していた。しかも米朝間の核廃棄交渉について朝鮮戦争以降の歴史的経緯を詳しく紹介していて私をはじめで知る内容がたくさん書かれていた。

その中でもとりわけ私を驚かせたのは「米国は過去70年間に50カ国もの主権政府を倒した、あるいは倒そうとした」「朝鮮戦争は休戦協定に留まっていて戦争は継続中である。北朝鮮の核武装は自衛手段なのだ」という指摘であった。

授業ではこの記事と朝日新聞の特集記事(2016/10/09)を比較するレポートを書かせたが、学生は枠組み合意(1994年)が破綻した責任についてお互いの意見が正反対であることに驚いていた。前者は米国が軽水炉建設、重油供給、国家の「体制保証」という約束を果たさなかったからだ主張し、後者は北朝鮮のウラン濃縮(2002年)が明るみに出たからだ解説していた。

(出典 <https://www.counterpunch.org/2017/09/08/why-trump-wont-start-a-war-with-north-korea/>)

このウラン濃縮についてはレポートで触れている学生が数人いた。この件にWhitney氏の記事には何の言及もなかったのが調べてみたところ、この記事の一部が引用されていたTim Schorrock氏の原文にその答えが見つかった。Schorrock氏はそこで「ウラン濃縮については、2007年の米連邦議会で米情報機関の高官がCIAは“中程度の確実性”しかもっていなかったと証言して、それが実験計画だったことが裏付けられた」と述べていた。授業ではこの翻訳を配付して該当箇所を読み合わせた。

(出典 <http://peacephilosophy.blogspot.com/2017/09/tim-shorrock-diplomacy-with-north-korea.html>)

この記事の後にはMax Keiser“US ‘Empire of Debt’ will go to war to stop emergence of petro-yuan”(2017/10/25)という記事も読んだ。Keiser氏の主張は「借金帝国」アメリカはペトロ元という非常事態を止めるために戦争に進む」というものだった。Whitney氏とはまた別の観点から情勢を分析し、戦争の開始はあり得ると論じていた。なお、これは私が所属する研究所の所長である寺島隆吉氏が所員向けに紹介した記事のひとつであった。

(出典 <https://www.rt.com/business/407789-us-petro-dollar-yuan/>)

私は英語学習の意義について「日本では生活や仕事で英語を話したり聞いたりする機会は少ないが、英語が読めると国内のマスコミが報じない情報を知ることができるので、視野が広がり世の中の動きを複眼的に見ることが可能になる」と学生に語っている。この授業もそんなことを願って行ったものである。

<引用文献>

- 久保田勇人(1990)「Thatの語順訳を探る」、寺島隆吉(編)『読みの指導と英文法』三友社出版 80-86頁  
寺島隆吉(1986)『英語にとって学力とは何か』三友社出版  
寺島隆吉(2002)『英語にとって教師とは何か』三友社出版  
寺島隆吉・寺島美紀子(編)(2001)『魔法の英語—ふしぎなくらいに英語がわかる練習帖』あすなろ社  
寺島隆吉・寺島美紀子(編)(2004)『センとマルとセンで英語が好き!に変わる本』中経出版  
寺島美紀子(2002)『英語「直読直解」の挑戦』あすなろ社

- 寺島美紀子 (2017) 「難しい教材を易しく—「記号づけプリント」の新段階(2)」国際教育総合文化研究所 出版記念兼2017年春の研究会発表原稿
- 安井稔 (1987) 『英語学概論』開拓社
- 山田昇司 (2016、監修寺島隆吉) 『寺島メソッドアクティブ・ラーニング』明石書店
- 山田昇司 (2018a) 「放送大学・面接授業において「何を」「どう」教えたか—19歳から91歳までの英語「再出発」『教職課程センター研究報告』第20号 275-309頁
- 山田昇司 (2018b) 「チャップリン「独裁者・結びの演説」—その教材作成をめぐって考えたこと」『朝日大学経営論集』第32巻 31-58頁

<資料>

1. Mike Whitney “Why Trump Won’t Start a War With North Korea” (2017/09/08) No.1 (全17枚)
2. Norman Cousins (1979) “An Anatomy of an Illness Perceived by a Patient” No.11 (全30枚)
3. Norm Chomsky (2017) “Requiem for the American Dream—the Ten Principles of Concentration of Wealth and Power” No.9 (全25枚)

September 8, 2017

## Why Trump Won't Start a War With North Korea

by Mike Whitney

2017年9月8日

トランプが北朝鮮との戦争を始めない理由

マイク・ホイットニー



<出典>

<https://www.counterpunch.org/2017/09/08/why-trump-wont-start-a-war-with-north-korea/>

1

<sup>1</sup> Donald Trump (isn't going) (to start) 'a war [with North Korea]. <sup>2</sup> That ('s just not going) (to

happen].

Not only (does the United States not have) the ground forces<sup>3</sup> [for such a massive operation]<sup>4</sup> but,

more important, 'a war [with the North]<sup>5</sup> (would serve) no strategic purpose [at all].<sup>6</sup> The US

already (has) the arrangement<sup>7</sup> [it (wants) [on the Peninsula].<sup>8</sup> The South (remains) [under US

military occupation],<sup>9</sup> the economic and banking systems (have been successfully integrated)<sup>10</sup> [into

the US-dominated western system],<sup>11</sup> and the strategically-located landmass [in northeast Asia]

<sup>12</sup> (provides) an essential platform [for critical weapons systems<sup>13</sup> <sup>14</sup> that (will be used) (to encircle)

38 <sup>1</sup> Increasingly, in the medical press, articles are being published about the high cost of the

negative emotions. <sup>2</sup> Cancer, in particular, has been connected to intensive states of grief or anger

or fear. <sup>3</sup> It makes little sense to suppose that emotions exact only penalties and confer no benefits.

( 5 ) ( 1 ) [ 8 ] ( 1 )

39 <sup>1</sup> At any rate, long before my own serious illness, I became convinced that creativity, the will

to live, hope, faith, and love have biochemical significance and contribute strongly to healing and

to well-being. <sup>2</sup> The positive emotions are life-giving experiences.

( 4 ) ( 2 ) [ 6 ] ( 1 )



④ <sup>1</sup>You read the business press <sup>2</sup>in the 1920s <sup>3</sup>and it talks about the need <sup>4</sup>to direct people to the superficial things of life, <sup>5</sup>like "fashionable consumption," <sup>6</sup>and that'll keep them out of our hair.

あなた 読む 経済のニュース 1920年代の すると それ 語っている ～について 必要性 読者を注向ける  
 取るに足らないモノ 生活の ～のような 「流行を追いかける消費」 そして それ 保つ 彼らを 私たちの髪の毛の外へ

3  1 [ 7 ]

1

2

3

4

5

6

3+4

\* out of our hair 私たちの髪の毛の外に → 私たちの邪魔をしないところに

⑤ <sup>1</sup>In fact, <sup>2</sup>Bernays had major achievements in his lifetime <sup>3</sup>that are worth looking at.

実際に パーネイス 持った 大きな仕事 彼の生涯で それ ある 価値が 目を付けてみる

2  1 [ 4 ]

1

2

3

2+3

⑥ <sup>1</sup>The first of them was <sup>2</sup>to get women to smoke.

最初のもの それらの あった 女性をさせること 喫煙するように

1  1 [ 3 ]

1

2

